

History of the Ikemori Tanaka with Sayamaike

池守田中家と狭山池

事業概要

池守田中家は、慶長13年（1608）の狭山池改修の際に在地の代官を務めた後、明治時代に至るまで狭山池の池守を継承した家系である。また、近世には所在する池尻村の庄屋や同村に陣屋を構えた狭山藩の藩士としても活動し、近代には狭山村の村長を務めるなど、多彩な性格をもつ。

池守田中家の歴史資料は、これまで大阪府立狭山池博物館寄託の約12,000点に及ぶ古文書群「池守田中家文書」が知られ、目録刊行と公開などの活用もおこなわれる。池守田中家文書は、田中家のもつ多彩な性格から、近世狭山池の関連事項のみならず、近世から近代にかけての南河内地域の政治や文化、生活を語る上で貴重な資料と評価されてきた。

平成30年度から大阪狭山市教育委員会で実施した池守田中家の文化財調査では、新たに大量の資料を確認した。新出の資料は古文書に加えて、写真や生活用具など多岐に及ぶ。

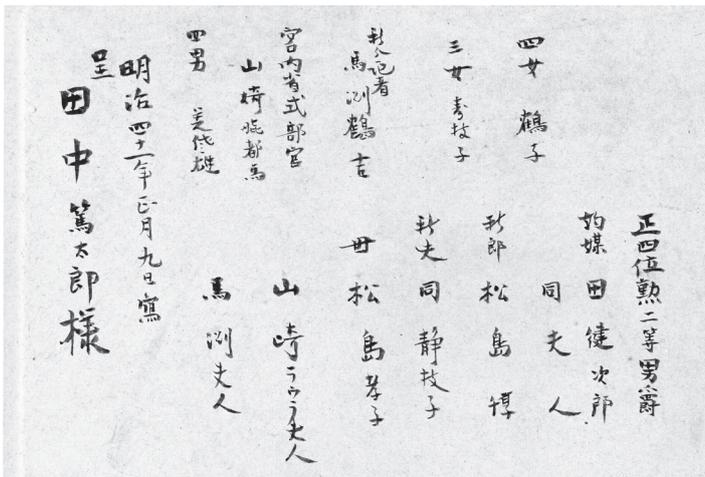
本事業の目的は、池守田中家の新出資料とともに未整理資料を対象に、調査をおこなうことにある。目録を作成し、資料の価値を明確にすることで、資料の散逸や亡失を防ぎ、今後の活用に資することを目指している。

令和4年度は、古文書・写真の整理と調書作成をおこなった。現在、古文書全点のラベル貼り付けを終了し、調書は、8,368点を作成している。



「調査対象」資料の一部

写真1



写真資料No.171 松島惇婚礼記念写真
写真：21.0 × 27.0 (cm)
フレーム：34.5 × 41.9 (cm)
写真下部印刷文字
「日比谷写真館 東京帝国ホテル前」
(明治41年1月9日写)

(裏面)

資料紹介① 松島惇関係写真資料

令和の調査で収集した資料には、多くの写真資料が含まれる。アンプロタイプの古い原版から、乾板、そして昭和時代のもので、現在内容確認が終了しているもので700点を越える。これからの調査でさらに点数は増え、最終的には1,000点を越える写真資料群となる。

現在までに調査済みの写真群の中に、「^{まつしまあつし}松島惇」という人物の写真が数点残されていた。もっとも大判の写真の一つに、彼の婚礼の記念写真がある(写真1)。

松島惇は、明治41年(1908)に日比谷大神宮(現在の東京大神宮。東京都千代田区)で式を挙げ、その際に、記念写真を撮影したとの記録がある。記録を残したのは、媒酌人を務めた「田健次郎」である。田健次郎は、台湾総督府・枢密院委員などを歴任した明治政府の重鎮である。本稿では、松島惇の婚礼記念写真を手がかりに、幕末から明治における池守田中家ゆかりの人物の実態の一端を関連史料を交えて紹介する。

写真2



写真資料No.164 松島隆成他集合写真
 写真：13.8×18.4(cm)
 フレーム：24.1×30.2(cm)
 写真下部印刷文字
 「工藤孝 東京都神田区錦町錦輝館隣」

【惇の父母】

①【松島孝子】—田中孝 惇の実母—

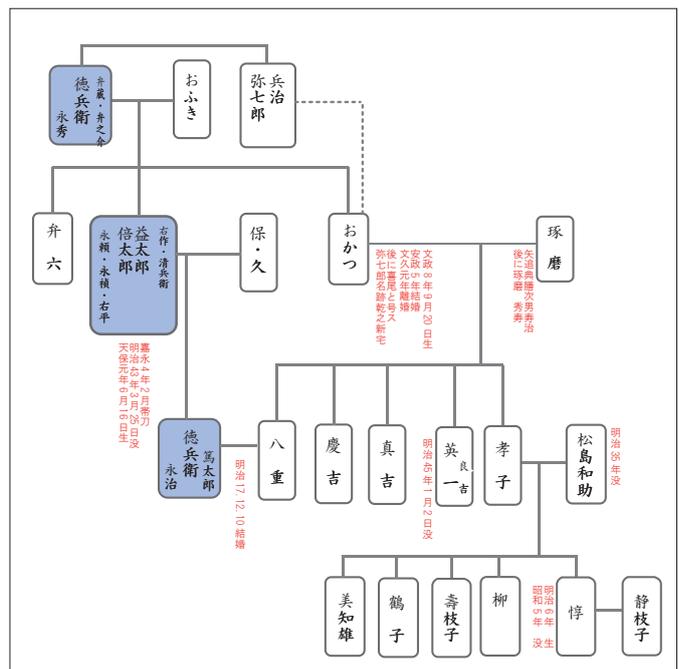
写真1に写る惇の母「松島孝(孝子)」の旧姓は、「田中孝(以下「タカ」と記す)」である。明治初期に松島和助と結婚し、松島姓を名乗る。

タカの母カツは池守田中家 10代当主田中右作(益太郎)の姉にあたる。母カツは婿養子を取ったため、ともに幕末生まれのタカと兄「英一(幼名良吉)」は、田中姓となる。カツは、父永秀の兄で体の弱かった兵治(乾の隠居)の家を継ぎ、その財産を相続する。

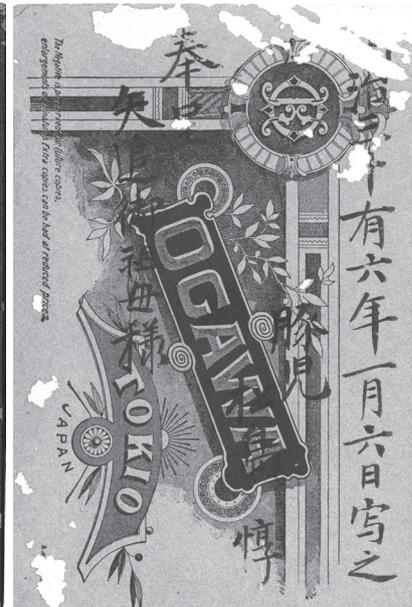
明治維新後の明治5年(1872)頃、英一とタカは東京へ向かう。タカが松島和助と結婚した時期は定かではない。明治2年(1869)の日付で田中右作(10代池守)と松島和助が書状を交わし、明治6年(1873)に「惇」が誕生するので、松島とタカの結婚は明治2年から6年の間と推測できる。

②【松島和助(隆成)】—惇の実父—

土佐藩士であった松島和助は、慶応2年(1866)京都で土佐藩士6人とともに「三条制札事件」を起こす。京都の治安維持に当時あっていた新選組と対峙し、6人中2名が死亡するなか、松島は生き残る。松



池守田中家略系図(英一関係者部分のみ)



写真資料No.164 松島惇
写真：13.9 × 9.8(cm)
フレーム：16.8 × 11.0(cm)
写真下部印刷文字
「K. OGAWA. TOKIO, JAPAN」
写真裏面
「明治三十有六年一月六日写之
豚児 松島惇
奉呈 矢追御祖母様」

写真3 松島惇 明治36年撮影 (裏面)

島和助の名を、史料で確認できる最初の事件である。陸援隊にも参加し、明治3年(1870)には、東京で兵部省の軍曹であったとの記録がある(山内家史料)。

和助と池守田中家との関係の初見は、明治2年(1869)に田中右作が和助に宛てた手紙の下書きである。明治2年当時、池守田中家の関係者で東京在住は、タカの兄英一と、タカの叔父にあたる弁六(田中家から植田家に養子に入る)になる。田中英一・松島和助・植田弁六の3人に面識があったことは、弁六が母(おふき)に宛てた手紙(午(明治3年〔1870〕)12月付、田中右平宛)に下記の記載があることから推測できる。

御写真御下被下候処、大坂御姉様(英一母カツ)ト御同写二付、実ニ難有、久々ニ為尊容誠ニ実ニ御咄仕事不成、ダケ浦山敷ト奉存候ハ、早速、良吉(英一)江相見候処、松嶋公(和助)モ誠見ト被申候付、相見せ共示相悦居候。松嶋公二者、良吉始、僕(弁六)も実ニ御世話ニ相成候、此段御母様にも、御安心被候ハ御様、又御悦可被成候ハ者、先仰御母上様より被仰候ハバ、御短刀身可被候ハ、思召の趣御申越被遊候ハ誠ニ御聞取被下難有奉存候。

※()内は筆者補注。以下同様。

タカと英一の母(カツ)と弁六の母(保)の写真を、英一・弁六・和助の3人で見た様子を伝える内容である。

松島和助は、隆成と改名し、各地の裁判所・警察署で勤務後、明治22年(1889)宮内庁皇宮警察へ勤務する。松島和助一家の家族写真も、池守田中家に残り、皇宮警察の制服を着た男性を中心に、惇を含む子どもの姿が残る(写真2)。この写真を撮影した当時、惇の年齢は、十代半ばと考えられる。なお、松島和助は、皇宮警察在職中の明治35年(1902)に59歳で没している。

③【田中英一】一惇の叔父一

タカの兄英一は、嘉永2年(1849)に田中家に生まれ、明治元年(1868)を20歳で迎える。

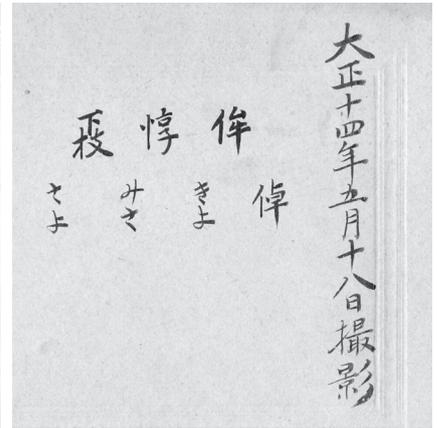
先述の、弁六の手紙が書かれた明治3年頃、和助と英一は、兵部省に在席している。また、英一は、東京の北条邸に居ると、叔父にあたる田中右作宛ての書簡に記してある。

そして、明治5年(1872)頃には、植田家から離縁した弁六を引き取ったとも伝える。

池守田中家文書の中には、明治元年から10年頃までに英一から右作や保(右作妻)に宛てた手紙が多く残る(令和第32箱)。東京からの手紙として、弁六の書簡とともに袋に入れて保管されていた。

英一は、晩年、逓信省経理局大阪出張所での勤務を経て、明治45年(1912)に没する。英一の墓石は田中家墓地に残り、位牌は現在も田中家で管理している。

写真4



(裏面)

写真資料No 令 9-77

写真：13.9 × 19.9(cm)

フレーム：23.7 × 30.9(cm)

写真下部印刷文字

「K. Itawa」

田中家の関係者で、幕末から明治にかけて東京に在住した3人を紹介した。このうち田中英一・松島和助については、明治3年(1870)頃には兵部省に在席し、その後官吏(国家公務員)となる。その際に関係をもったのが、松島惇の媒酌人を勤めた「田健治郎」と考えられる。

田健治郎が官吏として勤めて以降、田・松島・英一の3人が多くの場所で交わっている(P7表参照)。

3人の職歴から考えられる関係について整理すると次のようになる。

【松島和助・田中英一と田健治郎】

松島和助と田中英一は、明治3年(1870)頃、ともに兵部省に所属する。

田中英一は、叔父にあたる田中(植田)弁六が北条氏恭に仕えた関係から、旧狭山藩士でないが、明治3年当時、東京の北条邸にいたと考えられる。英一が兵部省に所属する背景には、狭山藩との関係を推測できる。ちなみに弁六が実家宛ての手紙の中で世話になったと記す狭山藩士の池田氏は、兵部省から陸軍省に所属し、旧狭山藩士の中でも、旧藩主北条氏恭近くで行動していた人物だと推測できる。

つぎに田健治郎は、兵庫県の出身で幕末に篠山藩へ出仕するが、明治維新後は篠山藩と無関係の場所で活動を始める。田と英一が初めて出逢うのは、愛知県官吏を勤めた時期だと考えられる。明治7年(1874)から同9年ごろに松島和助は、愛知県に勤務する。また、田健治郎は明治8年(1875)愛知県に出仕する。明治9年(1876)には、英一も愛知県に出仕した記録が残る。

明治9年、田健治郎は愛知県裁判所へ異動し、翌明治10年には、松島・英一・田の3人ともに司法省勤務となる。

それ以降、明治13年(1880)田の高知県警察本部への異動を期に、松島は栃木県警へ、田が神奈川県警へ異動すると、英一が神奈川県警へ勤務先を変える。

その後、明治23年(1890)に田が通信省へ異動すると、明治27年(1894)に、英一も地方郵便局長の任に就く。このように、明治維新直後に愛知県の官吏として3人は出逢う。松島が最終的に皇宮警察へ勤務するのに対し、英一は、田健治郎の勤務異動に伴い、晩年まで田と関係の深い通信省関連の官吏を勤める。

この田と英一の関係が、後に惇と田の関係につながることを次に紹介する。

【田健治郎と松島惇】

松島惇は、明治6年(1873)松島和助・タカの息子として生まれる。田健治郎と松島惇の関係を示す資料が、今回紹介する惇婚礼の記念写真になる。この婚儀の詳細は、『田健治郎日記』に記載が残る。惇の結婚式は、明治41年(1908)1月9日、当時最新の婚礼形態として流行する神前結婚で日比谷大神宮で挙式する。父の和助は既に亡くなり、田健治

郎夫妻の媒酌で執りおこなう。新郎側の出席者として、松島タカのほか、惇の弟妹の姿が記念写真にみえる。

午後一時、日比谷太神宮の松島惇・山本静江結婚式に臨む。予夫妻媒酌の職を行ふ。式了り一同撮影、更に三橋樓に転じ、晚餐の饗を受けて散ず。
(『田健治郎日記』明治41年1月9日条)

此夕、大久保候夫妻、家兄昌夫妻、松島惇夫妻、弟妹、宇高果、鈴木徳松諸氏を招く。洋楽師及び和琴師を聘し、
(『田健治郎日記』明治41年1月12日条)

松島惇の叙勲の際の経歴によると、明治28年(1895)から通信省書記補として勤務している。この時、田健治郎は通信省通信局長を務めており、明治28年に通信省通信部に田と惇の名前が『職員録』に残る。その後、惇は通信省通信局を経て、明治39年(1906)に朝鮮総督府の前身「朝鮮統監府」の通信監理局へ勤務し、昭和5年(1930)に釜山郵便局長の任についていた。こういった外地での勤務は、田健治郎が通信省参事官の池田十三郎に紹介し、その任に着いたという。

これらの経歴についても、惇の訃報でも確認でき、田健治郎が惇を預かった時期の出来事にも触れている。

此の日、釜山局長松島惇、死去の訃電到来、其の詳報は郵書に譲るの旨を復言しおり、死因未だ確知するべからず。彼幼時(十一、二歳の時)横浜に於て、叔父田中英一の嘱に依り、予が収養せし所と為り、長じて予、池田朝鮮交通部長に之れを紹介し、其の属僚に任用、後釜山局長に転任し茲に有年、古陶磁器の蒐集を以て頗る名を得。今溘焉を聞くも死因未だ詳ならず、洵に悼むべき也。
(『田健治郎日記』昭和5年5月13日条)

この記事によると、惇の叔父「田中英一」からの頼みで、「田健治郎」が惇を引き取って世話し、養っている。惇が11歳か12歳にあたる明治17年(1884)頃、田中英一(叔父)が、田健治郎と同じ神奈川県警察に勤務し、松島和助(惇の父)は島根県浜田警察署長をしている。この時の松島家の動向は明らかでないが、松島家としても惇を東京在住の田健治郎へ預け、より良い環境での養育を依頼したと推測できる。

先述したように、松島惇は、昭和5年(1930)朝鮮総督府通信局釜山郵便局長に在職中、58歳で亡くなる。惇とともに釜山に同行していたタカが、妹(八重)の夫で当時池守田中家の当主であった田中篤太郎へ宛てたハガキが田中家に残る。惇の死に触れないものの、残された子どものために、釜山から京城(今のソウル市)へ戻ることを伝えている。さらに惇の家族写真も、田中家の史料の中に残る(写真4)。

【おわりに】

史料調査事業で新たに所在確認できた1点の集合写真をもとに、池守田中家関係者の大阪以外での活動を幕末から明治にかけて追ってみた。明治維新以後の田中家にとって、東京在住の親類がどのような意味をもったか明確でないが、松島夫婦の息子である惇が、昭和に至るまで大阪の田中家と連絡を取り続けた形跡を、残る写真から読み取ることができる。あわせて『田健治郎日記』には、惇の記事とは別に、「松島母」「宇高果」と呼ぶ、タカと田健治郎との面会の記載がある。

明治・大正期に日本政治の最前線で活動した田健治郎が、池守田中家の人と縁があった点については、その意義を見出すことは現時点でできていない。しかし、池守田中家に残る1点の古写真から、多様な歴史情報をたどることができた。彼らの関係から、今後も多くの情報を得ることができると考える。

一見無関係に見える小さな史料であっても、丹念に周辺史料を探ればより大きな背景を知ることができる。丁寧な史料調査の必要性を感じた次第である。

明治期 池守田中家に関係した大阪以外に居住した人物の動向

		松島和助(隆成)	田中英一(良吉)	田 健治郎	年齢	松島 惇	年齢	田中弁六	年齢
		弘化元年(1844)誕生	嘉永2年(1849)誕生	安政2年(1855)誕生	8			嘉永3年(1851)誕生	
文久3年(1863)					9			植田家に養子(13)	13
元治元年(1864)					10				14
慶応元年(1865)					11			氏恭の近習(15)	15
慶応2年(1866)		三條制札事件(23)			12				16
慶応3年(1867)		陸援隊参加			13				17
明治1年(1868)		二条城屯所(軍務局)(24)	(19)	(14)	14			(17)	18
明治2年(1869)		大阪治河局			15			元年に20歳の情報もあり	19
明治3年(1870)		兵部省軍曹(27)謹慎	兵部省北条邸在(22)		16			(在北条邸)(19)	20
明治4年(1871)		刑部省			17				21
明治5年(1872)		権大舎人番長			18				22
明治6年(1873)		愛知県14等出仕	愛知県松島宅在(25)		19	明治6年5月6日生	1	田中姓に戻る(23)	23
明治7年(1874)		愛知県権小属(31)	愛知県松島宅在	熊谷県出仕(20)	20		2	陸軍省	24
明治8年(1875)		同権中属(32)		愛知県出仕	21		3	陸軍省教団部	25
明治9年(1876)		若松県→福島県→司法省	愛知県官吏(司法省)	愛知県史生(司法省)	22		4		26
明治10年(1877)		人吉裁判所所長・九州臨時裁判所	16等出仕	司法省 15等出仕	23		5		27
明治11年(1878)		熊本裁判所	司法省(29~31)	名古屋裁判所判事補(24・25)	24		6		28
明治12年(1879)					25		7		29
明治13年(1880)		栃木県警察 警部	名古屋裁判所判事補(32~34)	高知県検察警部(26・27)	26		8	鳥居家婿養子(30)	30
明治14年(1881)					高知県警察本署長(28)	27		9	
明治15年(1882)					神奈川県警部長(29)	28		10	
明治16年(1883)		島根県警察 警部(43)			29		11		
明治17年(1884)			神奈川県警警部(36~38)		30	12歳(田宅へ)	12		
明治18年(1885)					31		13		
明治19年(1886)		同今市検査支那次長				32		14	
明治20年(1887)		島根県今市警察署長	神奈川県樹郡警察署長(39~41)	神奈川県警察本部警部長(33・34)	33		15		
明治21年(1888)						34		16	池田十三郎
明治22年(1889)				埼玉県警察本部警部長(35)	35		17	第1高等学校卒業帝大入学	19
明治23年(1890)			神奈川県大住郡警察署長(42~45)	逓信省大臣官房書記官(36)	36		18	法科大学特待生(2年)	20
明治24年(1891)					逓信大臣秘書官(37)	37		19	21
明治25年(1892)						38		20	22
明治26年(1893)				逓信省大臣官房文書課課長(39)	39		21	東京郵便電信学校教授	23
明治27年(1894)				逓信省通信局長(40・41)	40		22	24	
明治28年(1895)		宮内省 皇宮警察(46~59)	姫路郵便局電信局長(46~49)	(万國電信会議参加・ハンガリー)	41	郵便電信書記補	23	東京郵便電信学校教授兼幹事	25
明治29年(1896)						逓信省電無務局長	42	通信書記補	24
明治30年(1897)				逓信省電無務局長	43	通信書記補	25	神戸市郵便電信局長	27
明治31年(1898)			高松郵便電信局長(50・51)	逓信次官兼逓信省鉄道局長	44	通信局 属	26	横浜郵便電信局長	28
明治32年(1899)				関西電気鉄道株式会社取締役	45	通信局 属9	27	29	
明治33年(1900)				逓信総務長官(46)	46	通信局 属8	28	大阪郵便電信局長	30
明治34年(1901)				衆議院議員(47)	47		29	通信局書記官(外信課長参事官)	31
明治35年(1902)		没(59)		衆議院議員(48)	48	通信局庶務課 属6	30	逓信省大臣官房参事官(外信課長)	32
明治36年(1903)				逓信総務長官・通信次官	49	通信局 属6	31	同参事官兼横浜郵便局長	33
明治37年(1904)				通信次官(50)	50	通信局 属5	32	同参事官兼東京郵便局長	34
明治38年(1905)			逓信省経理局大阪出張所 属5	通信次官(51)	51		33	同参事官兼勸告出張	35
明治39年(1906)				貴族院議員	52	朝鮮統監督府 通信監理局 属4	34		36
明治40年(1907)					53		35		37
明治41年(1908)					54	朝鮮統監督府 通信監理局 属3	36	朝鮮統監督府 通信管理局長	38
明治42年(1909)			逓信省経理局大阪出張所 属4		55	同通信監理局 属2	37		39
明治43年(1910)					56		38		40
明治44年(1911)					57	朝鮮統督府 通信書記 2	39	朝鮮統督府 通信局長官	41
大正元年(1912)			没(64)		58		40		42
大正2年(1913)					59	同通信局庶務課書記2(朝鮮統督府通信書記)	41		43
大正3年(1914)					60		42	同 通信局長官	44
大正4年(1915)					61	同通信書記(筆頭)2	43		45
大正5年(1916)				通信大臣(62)	62		44		46
大正6年(1917)					63		45		47
大正7年(1918)					64	同通信書記(筆頭)1	46		48
大正8年(1919)				台湾総督(66)	65		47		49
大正9年(1920)					66		48		50
大正10年(1921)					67	同通信事務官補	49		51
大正11年(1922)					68		50		52
大正12年(1923)				農商務大臣兼司法大臣(69)	69		51		53
大正13年(1924)					70	同通信副事務官	52		54
大正14年(1925)					71		53		55
大正15年(1926)				枢密院顧問	72	郵便為替貯金管理局 所長(副事務官)	54		56
昭和2年(1927)					73		55		57
昭和3年(1928)					74	京城貯金管理局 所長(副事務官)	56		58
昭和4年(1929)					75	8/1~釜山郵便局長	57		59
昭和5年(1930)				没(76)	没	~釜山郵便局長 病没	没		60

() 内の数字は年齢

資料紹介② 慶応三年十一月十二日付 植田弁六郎書状

本史料は、現在調査を進めている池守田中家文書の新出分の書状である。法量は縦 16.3cm、横 92.5cm。写真と釈文を示す。

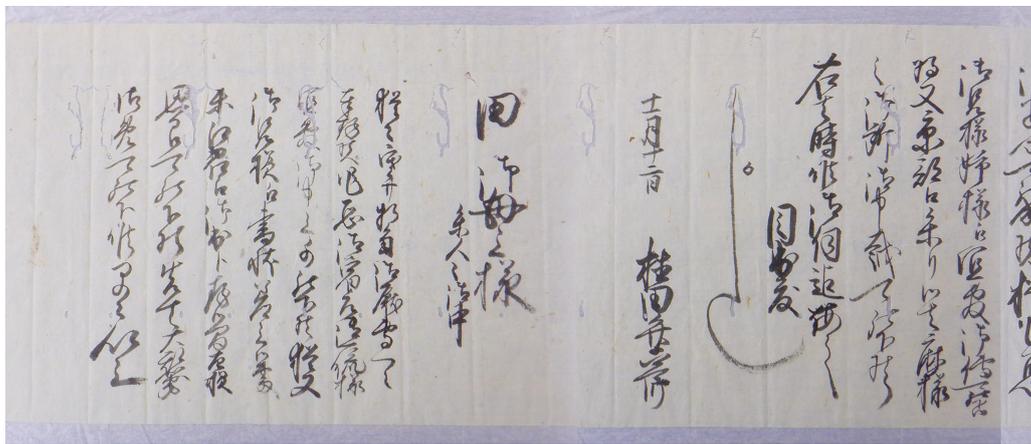
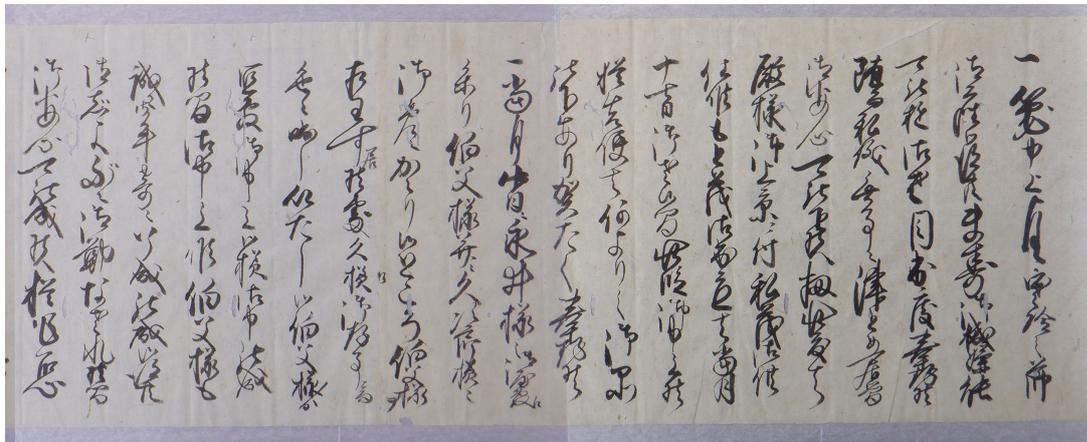


写真1 慶応三年十一月十二日付 植田弁六郎書状

一筆申上候べく候、寒冷之節御座候得共、ます御機嫌能可被遊御さ目出度奉存候、随而私儀無事二つとめ居候間、御安心可被下候、扱此度者殿様御上京二付、私も御供仕候、もとも御出立者当月十七日御さ候間、此段御申上候、猶先使者何より之御品被下ありがたく奉存候、

一当中日二永井様之御屋敷江参り伯父様并二久次郎様二御めにかかり候ところ、伯父様相わず居候処、久様御存事二而色々咄しいたし候、伯父様方宜敷御申上候様御申被成候間、御申上候、伯父様も誠二御年寄に了成被成候得共、御じよぶ二御勤なされ候間、御安心可被成候、猶乍恐御兄様姉様江宜敷御伝可被下候、猶又京都江参り候者、麻様之御所御申越可被下候、

右者時候御伺迄あらく、目出度かしく、

十一月十二日 植田弁六郎

田御母上様 参人々御中

猶々寒サ折角御厭専可奉存候、乍恐御宿元御一統様宜敷御申上可被下候、猶又御兄様江書状差上候処、未江州江御出卜存候間、左様思召可被下候、先者大乱筆御免可被下候、草々以上

差出人の植田弁六郎は、池守田中家の九代目当主徳兵衛永秀の六男であり、狭山藩士の植田家の養子となった人物である。元治元年（1864）に植田家の養子となった後、狭山藩へ出仕し、藩主である北条氏恭の側近として活動した^(A)。明治維新後も明治天皇侍従となった氏恭の近くで家僕としてしばらく活動するが、明治7年（1874）に植田家と離縁して田中家に戻った後は陸軍省へ出仕し、その免役後は堺の鳥井家の婿養子になっている。本史料は、弁六郎が植田姓を名乗ることから、元治元年（1864）から明治6年（1873）までのものである。

主な内容は2点ある。1点目は、「此度者殿様御上京二付、私も御供仕候、もともと御出立者当月十七日御さ候」とあり、藩主氏恭の上京にお供して京都へ行くことを知らせた内容である。元治元年から明治7年の間で氏恭が京都に入ったのは、管見のかぎり元治元年2月、慶応3年（1867）11月、明治元年（1868）閏4月の3回ある。書状の日付が11月10日であり、文中に「御出立者当月十七日」とあることから、本史料は慶応3年のものと推測できる^(B)。

この年の10月15日に大政奉還がされると、朝廷は諸大名に上京を命じる。氏恭はこれに応じて上京し、京都四ツ塚関門の警衛を命じられる。氏恭が京都の私邸に入るのが11月29日である。弁六郎は氏恭の側近として、江戸からの上京に従い、氏恭とともに京都にとどまったと思われる^(C)。

池守田中家は、遅くとも近世の中頃から歴代当主が狭山藩へ出仕し、代官役を務めたことが明らかになっている^(D)。当時の田中家当主であり、弁六郎の兄にあたる田中徳兵衛永禎も、文久3年（1863）に狭山藩より代官見習を仰せつけられ、近江国内にあった狭山藩領の代官を務めている^(E)。猶々書に「御兄様江書状差上候処、未江州江御出ト存候」とみえるのも、この時に永禎が近江へ出張していたからであろう。このような池守田中家と狭山藩の関係から、弁六郎は自分の近況と合わせて、藩主の動向を田中家へ報告したと推測できる。

2点目は、永井の屋敷を訪れ、伯父と久次郎に面会したことである。ここでいう叔父と久次郎が誰かを考える上で、書状の宛所となっている弁六郎の母に着目したい。弁六郎の母の出自は、摂津高槻家中の豊田専右衛門の娘である^(F)。そのため「永井様之御屋敷」とは高槻藩主永井氏の江戸屋敷であり、「伯父様并ニ久次郎様」は母の兄弟か縁者と考えられる。会話内容は伝わらないが、当時、弁六郎が池守田中家と母の実家にあたる豊田家をつなぐ役目を果たしたと推測できる。

今回紹介した史料は、池守田中家と狭山藩をはじめとする武家との関係、幕末維新期の狭山藩と藩主の動向を考えるうえで貴重である。調査を進めている池守田中家文書には、弁六郎のほかにも、幕末から近代初期にかけて他家へ養子に出た子息や縁付いた娘たちをはじめとする親戚縁者からの書状・書簡が多く含まれている。それらの中には幕末の京都や明治初期の東京の情勢の報告を多数含む。それらの史料の調査・研究を進めることで、池守田中家という地方の有力者が幕末維新期をどう理解していたのか、また池守田中家がどのような状況に置かれていたのか、興味は尽きないが今後の課題としたい。

【注】

(A) 大阪狭山市教育委員会編『史跡狭山池関連文化財 池守田中家文化財調査報告書』大阪狭山市教育委員会、2021年。

(B) 氏恭の動向は「履歴摘要」（北条家文書）を参照。また、廃藩前後の年次比定は、山脇大輝「狭山藩の廃藩と最後の藩主北条氏恭」（大阪狭山市郷土資料館図録『さやまのお殿さま—藩主北条氏の足跡—』大阪狭山市教育委員会、2019年）を参照。

(C) 狭山藩の四ツ塚関門警衛については、大阪狭山市史編さん委員会編『大阪狭山市史 第一巻 本文編 通史』大阪狭山市役所、2014年を参照。また、関係史料は大阪狭山市史編さん委員会編『大阪狭山市史 第三巻 史料編 近世』大阪狭山市役所、2010年に収録。

(D) 吉川邦子「狭山池由緒書の成立と変化」（『大阪府立狭山池博物館 研究報告』2、2005年）。大阪府立狭山池博物館図録『狭山の御代官も大変でござる』大阪府立狭山池博物館、2022年。

(E) 山脇大輝「狭山池池守田中徳兵衛永禎の基礎的研究」（『大阪府立狭山池博物館 研究報告』12、2021年）

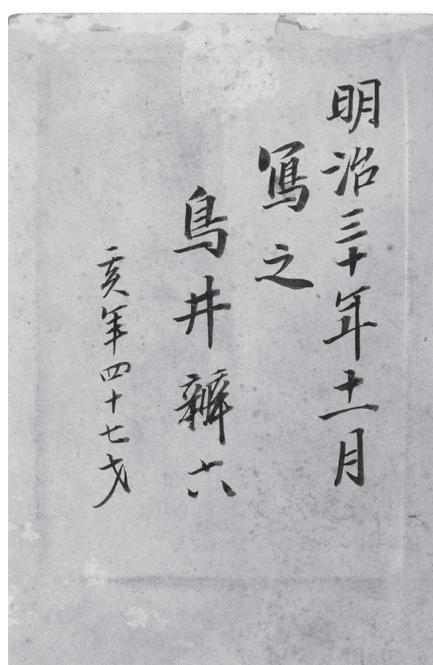
(F) 注E参照。

弁六郎略年表

年号	西暦	数え年	事項
嘉永4年	1851	1	9代目池守田中徳兵衛永秀の六男として生まれる
文久2年	1862	12	泉州岸和田の寺院に入るも田中家へ戻る
文久4年/元治1年	1864	14	狭山藩士植田家に養子に入る
元治2年/慶応1年	1865	15	狭山藩に出仕し、藩主北条氏恭の近習となる
慶応3年	1867	17	北条氏恭に供奉し、上京する
慶応4年/明治1年	1868	18	御近習本役となる
明治2年	1869	19	競と改名する
明治3年	1870	20	狭山藩廃藩後、北条家の家僕となる
明治6年	1873	23	植田家と離縁し田中家へ戻る
明治7年	1874	24	陸軍省へ出仕する
明治9年	1876	26	陸軍省を免役となる
明治13年	1880	30	堺の鳥井家へ婿養子として入る
明治35年	1902	52	没



写真2 鳥井弁六 明治30年撮影



(裏面)



全体の事業期間

令和3年4月から令和8年3月までの5か年

事業体制

事業主体：大阪狭山市教育委員会 事業組織：教育部歴史文化グループ
学識経験者による調査・指導及び文化庁の指導・助言のもと調査を進めています。



本事業は、文化庁地域活性化のための特色ある文化財（美術工芸品）調査・活用事業国庫補助金の交付を受けて実施されています。